

gunzou. 2022.10

連載

題名	事務に狂う人々		
筆者	阿部公彦		
No.	5.	副題	「失敗」から考える 事務処理
備考			

刷出

群像
22年10月号

人間と「過ち」の構造

「事務の憂鬱」の引き金となるのはミスである。空欄が埋まっていない。判子を押しつけない。締め切りに遅れた。「それぐらい、いいでしょ」と言いたくなることもあるが、そうはいかない。小さなミスが命取りになる。事務の裏側には巨大で複雑なシステムがひかえているのだ。ちよつとした誤作動で、たいへんな事態が引き起こされるかもしれない。

では、理想の世界は、こうした約束事をすべてクリアした先の至福の状態にあるのだろうか。そこにはエデンの園ならぬ、清々しい「事務の楽園」があるのか。うららかな日差しの下、「事務の子羊たち」が青々と茂る草を食み、「事務の子どもたち」が笛を吹きながら輪になって踊る。すべてが有機的に調和し、汚れも雑音もなく、美しく統合された事務システムが世界の秩序を守っている世界……。

残念ながら、現実にはそのような「事務の楽園」は存在しない。むしろ事務が事務たる所以は、形式が守られず、締め切りが破られ、違反や逸脱が発生するところにある。もちろん、それらが奨励されるわけではない。違反や逸脱

やミスを受け入れられるようになったら、その先は混沌としたアナーキズムしかない。事務はそうした無秩序を許さない。しかし、現実問題としてミスは起こり、そのミスが指摘されたり、叱られたり、ミスを悔やむ人がいたり、ミスの被害を受ける人がいたり、尻拭いをする人、怒る人、絶望する人がいるのである。これが事務処理時代の現実であり、つきつめれば事務の本質はこうしたトラブルとの付き合いにあるとさえ言える。

事務とミスはワンセットなのである。両者はともに私たちの生の現実にも組み込まれている。別の言い方をすると、私たちの生は「事務的なミスを犯す」というシナリオに組み込まれることで現実化する。してはいけないと思いなगरらも、ミスを犯してしまう。ミスは暴かれる。あるいは気がつかない。そこにこそ、人生の事務的リアリズムがある。作家たちは早くからこのことに気づいていた。

遡れば、事務処理時代の到来以前も人間の物語には「過ち」がつきものだった。過ちは事件を引き起こし、禍根を残す。しかし、かつては——たとえば聖書の時代でも——そうした禍根は何らかのメッセージとともに受け入れられた。過ちとはいえ、そこからは人間的・宗教的意味が立ち上がってきた。『聖書』に描かれる最初の過ちは、言うまでもなくアダムが神の教えに背いて禁断の木の実を食べてしまった事件である。結果、彼らはエデンの園を追い出された。西洋の世界認識は長らく「禁断の木の実を食べてし

「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によつて洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」

宗教的権威は、このように人間の過ちの上に君臨してきた。過ちを人間の内面や自由意志と関係づけることは人間の心の管理にもつながる。政治権力も同じである。宗教的な戒律や国家レベルの法は、逸脱や失敗に対する制御という形をとる。法の遵守が強制される一方、法が守られなかった場合の物語がふんだんに語られることで、警告が発せられたりアフターケアが提供されたりして、「過ちを犯す人間」へのより包括的な支配が行われてきた。

「過ち」から「偶然」へ

そんな中、一九世紀から二〇世紀にかけて、大きな変化が起きる。「過ち」が「事故」によつて置き換えられるようになったのである。その背後にあるのは、「偶然」への感受性の変化である。パスカーは二〇世紀のアメリカで労働

まった」という「原罪」の意識をよりどころにして築かれることになる。その後も、「過ち」は繰り返される。アダムとイブから生まれたカインとアベルの間では、嫉妬から来る争いが起き、カインが弟のアベルを殺してしまう。この過ちを神は見逃さない。「主は言われた。「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かつて叫んでいる。」こうしてアダムと同じように、カインも報いを受けることになる。

「今、お前は呪われる者となった。お前が流した弟の血を、口を開けて飲み込んだ土よりもなお、呪われる。土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない。お前は地上をさまよひ、さすらう者となる。」

しかし、これまたアダムと同じように、カインも断罪されて終わりではない。彼らは「過ちを犯してしまった祖先」として子孫を残し、後の世とつながる。そして彼らの「その後」を通し、「人間は過ちを犯すものだ」という世界観の形成に与る。旧約から新約の世界へと移っても、こうした過ちの構造は引き継がれた。イエス・キリストを裏切ったユダを典型に、過ちを犯した人間がいかに赦されるかがキリスト教の教義の柱となつていくのである。ペトロの台詞はこの構造を象徴する。

災害や交通事故が「過ち」よりも「偶然」(chance)としてとらえられるようになったことに注目し、大きなパラダイムの転換を見ている。かつてアリストテレスは偶然を本質的ではないものとして考察の対象から外した。これに対し初期近代のプロテスタントの神学では、偶然は神による介入と見なされ、その後も偶然には神聖な空気がついてまわる。ところが一八世紀から一九世紀にかけて確率の理論などが洗練され、偶然をめぐる合理的な理解が進む一方、思想家たちは物事の偶然性を、さまざまな科学的法則の不十分さからくる見かけ上のものと考えようにもなる。そこからはもはや神聖さが剥落しつつあった。

もともと事務処理は、偶然への依存を排除するところに大きな目的がある。事務の最大の機能は、さまざまな事象への安定した対処法の提供である。しかし、現実問題として逸脱や事故は起きる。そんな中、かつて濃厚な宗教臭を漂わせていた「過ち」は、注意力の欠如に由来する「ミス」と見なされ、より軽い扱いを受けたり、場合によっては「偶然」の産物と見なされる。むしろミスや偶然ならば厳しい宗教的な断罪もされにくくなる。しかし、これは宗教的な救いもはや期待できないということも意味する。ミス、偶然、事故という視点は、悔やむことすらできない虚無への入り口ともなるのである。

「過ち」の中でも特別な扱いを受けるようになったのは「交通事故」だ。近代社会の中で人間が移動する機会が格